

「豊かな生活」に気付いたら

小豆島町立小豆島中学校3年 小林 美櫻

救急車のサイレンが遠ざかっていく。一刻を争うそんな場面が今の今まで目の前で起こっていた。まだ心臓がバクバクしたままだけれど、私ができることは終わっていてあとは祈るばかりだ、とわかったとたんその場に座り込んでしまった。

さっきまで十五人ちかくの大人が祖父を救おうと右往左往していた。声が飛び交い、たくさんの機械や道具を使ってみんな懸命に動いていた。緊急事態に家族ができることはほんのわずか。緊迫した場面でテキパキと仕事をこなしていく救急隊のみなさんには感謝しかない。このように緊急通報をしたら救命のプロが助けに来てくれる。それがどんなに心強いことか。当たり前になっているけれどこれは公共のサービス。もし税金が使われていなければ救急車を呼ぶだけで有料になる。救命士の人件費も衣服や装備も、使用される医療機器も緊急車両も、車両を動かす燃料も全てお金がかかっている。本当に忘れがちだけれど、お金がないと何もできない。命の危機に直面して緊急通報するとき、お金の心配をしないといけないのは結構キツイ。誰だって命とお金を天びんにかけて迷いたくはないと思う。救命を求める人はみんな平等にサービスを受けることができる。これって今まで考えたことがなかったけれど「豊かな生活」ということかもしれない。衣食住が足りていて更に命とお金を天びんにかけて迷うこともない。これこそ国民生活が豊かな証だ。

緊急通報だけではなく、公共サービスは国民生活に溶け込んでしまって当たり前になりすぎていると思う。病気になって病院に行き診察やお薬を処方してもらってお金を払っているけれど、国民が払うのは一部の医療費で全てではない。家庭で出たゴミを決まった曜日に出せば収集して処分してもらえる。これも公共サービス。不審者がいたときや落し物をしたとき、何か困ったことがあったときに交番にかけこむ。交番が有料だったら？小さな子供からお年寄りまでみんな必要になる可能性があるのに「あなたを助けるには有料になります」だなんて言われると本当に困る。公共サービスはどれも必要不可欠で平等に使えないと困ってしまうものだとわかる。公共サービスはみんな使う可能性があるから、みんな税金という形でお金を出し合って支え合っているものだ。個人では平等に同じサービスを継続して提供できない。個人でできないことを助け合ってやっていく。それがみんなの税金によって可能になっている。「豊かな生活」を送っていることに気付かないで生活をしてきたというぜい沢。納税がどれだけ大事なことがよくわかった。将来、私も税金を払う立場になるとき、もう一度納税の大切さを思い出したい。